日本大学
大学史ニュース
2026.03
Vol.30
日本大学広報部広報課（大学史）

目次

◇予科練出身者の資料寄贈される …… 2
◇ジャーナリスト四ツ橋銀太郎関係の資料寄贈される …… 2
◇戦時体制下の日本大学に関する展示会を開催 …… 3
◇大学昇格を支援した校友　楢崎平太郎 …… 4
◇拳闘選手・亀岡勝雄 …… 6



迷彩が施された世田谷予科本館での集合写真（目黒区めぐろ歴史資料館所蔵）

この写真は、（旧制）日本大学第二中学校出身で、終戦後に予科文科に入学した神林敏夫（２頁参照）が所有していた写真アルバムの中の１葉で、世田谷予科本館（現在の文理学部１号館）前での集合写真です。

太平洋戦争後期、空襲への対策として、軍事施設や軍需工場をはじめ、主だった建物には迷彩が施されました。校舎もその一つで、世田谷予科校舎の迷彩写真は、これまで『一集団五班―その青春の軌跡―』（平成14年）に掲載の本館の全景写真は確認していましたが、昨年、昭和21（1946）年頃に正面玄関と背面出入り口前で撮影された写真２葉がみつかりました。本頁では、より迷彩箇所が写っている後者を掲載しました。

◆予科練出身者の資料寄贈される

令和７（2025）年10月、目黒区めぐろ歴史資料館から、（旧制）日本大学第二中学校（現日本大学第二中学校・高等学校）で作成・使用された冊子「臣道実践　錬成規範」が寄贈されました。表紙に「紀元二千六百一年」とあることから昭和16（1941）年作成で、巻頭の「君が代」に始まり、忠君愛国精神や同校の当時の校訓「至誠奉公」「質実剛健」「感謝報恩」の体現に必要とされる、事績や教訓などが綴られた小冊子です。



日本大学第二中学校
「臣道実践　錬成規範」

この資料は、使用していた神林敏夫（1928～2018）の長女弥生氏が目黒区に寄贈した資料群に含まれていたもので、同区から本学に寄贈の打診があり、受け入れたものです。敏夫は（旧制）日本大学第二中学校３年の時に海軍甲種飛行予科練習生（通称：甲飛）に採用され、昭和19年に第14期生として土浦海軍航空隊に入隊しました。


甲飛 第一種軍装姿
（昭和19年10月）
〔目黒区めぐろ歴史資料館所蔵〕

甲飛は、高等小学校卒業生を対象とした乙種飛行予科練習生（入隊時満15歳以上・修業年限３年）に比して、１年短い修業年限で下士官搭乗員を養成する課程でした。昭和12年の制度化当初は入隊時満16歳以上・学力中学校４年１学期修了が募集基準で、１期生の志願者は2,874名で採用者は250名、倍率は11.5倍でした。航空戦力の拡充に比例し採用数は増加し、それに対応するため、18年には入隊時満14歳６ヵ月以上・学力中学校３年修了に引き下げられています。


日本大学第二中学校２年生時代
（昭和17年）

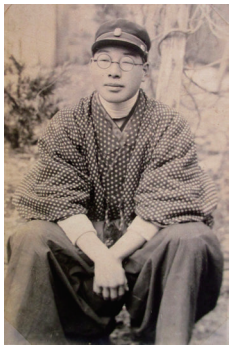
第14期生は19,086名が採用されましたが、１年も経たずに教育を終了。敏夫は、三〇二航空基地に配属されて終戦を迎え、戦後は世田谷の日本大学予科文科（１頁参照）に進学しています。

令和７年12月には、弥生氏から当課へ、敏夫が母（弥生氏の祖母）と共に写っている小学校と中学校時代の写真各１葉と予科時代の英語の試験答案１点を御寄贈いただきました。同氏と目黒区めぐろ歴史資料館には、あらためて御礼申し上げます。

（髙橋）

〔参考文献〕
小池猪一編『海軍飛行予科練習生』第１巻（国書刊行会、昭和58年刊）
岡正雄『予科練よもやま物語』（光人社、昭和59年刊）

◆ジャーナリスト四ツ橋銀太郎関係の資料寄贈される


富山商業学校時代
〔稲田伸子氏所蔵〕

令和６（2024）年６月、千葉大学法政経学部の佐藤健太郎准教授（同年10月教授）が、研究対象とされている日本大学専門部政治科を昭和４（1929）年に卒業した四ツ橋銀太郎（1904～1975）に関する資料調査のため、当課に来室しました。

四ツ橋は、富山県柿沢村（現上市町）出身。クリスチャンであり関西学院神学部に進学しますが、中退し帰郷します。在学中は弁論部に籍を置き幹事でした。大正15（1926）年、日本大学に入学し雄弁会で常務委員を務めます。演説は巧みだったようで、佐藤教授が当課で調査した『日本大学新聞』第116号（昭和３年



寄贈された四ツ橋関係資料

６月５日付）には、同年５月の校内雄弁大会で四ツ橋が登壇した際には、熱狂のあまり演壇に駆け上がる者もあったと記されています。反体制的演説活動を行い逮捕もされていますが、自由主義的進歩主義の立場から、左翼運動に深入りすることはありませんでした。



昭和42年日本大学校友会富山支部の集まり
（前列左から２人目）〔稲田伸子氏所蔵〕

卒業後、当時学生課長だった世耕弘一（後に本学理事・近畿大学初代総長）の斡旋で『東京朝日新聞』に入社しましたが、翌年には、帰郷して『富山日報』に入社、論説欄で選挙粛正運動を展開します。15年の県内４紙統合の際に退社、大陸に渡り、華北の経済開発を目的とする国策会社「（株）北支那開発」に勤務します。引き揚げ後の25年から『富山新聞』論説委員を務め、39年にはミニコミ紙『魁』を刊行、公正選挙・政界の浄化を主張し続けました。

四ツ橋について当課では未調査で、佐藤教授にご教示いただきました。また、同教授の仲介で、昨年12月、四ツ橋が所蔵していた日本大学関係の資料５点（昭和40年前後の雄弁会や校友会富山県支部の名簿など）を、令孫の稲田伸子氏から寄贈していただきました。お二人には、あらためて御礼申し上げます。（髙橋）

〔参考文献〕
佐藤健太郎「『富山日報』四ツ橋銀太郎の言論と選挙－選挙粛正運動とメディア」『千葉大学法学論集』第38巻第４号（令和６年）

◆戦時体制下の日本大学に関する展示会を開催

令和７（2025）年11月12日～12月24日、「昭和100年・戦後80年　終戦から80年―戦時体制下の日本大学―」展を、日本大学図書館法学部分館１階展示ギャラリーで開催しました。同年は、昭和100年・戦後80年の節目であったことから、当課では７月～９月に日本大学会館２階で「終戦から80年―戦時体制下の日本大学―」展を実施しましたが、会期中に、法学部図書館事務課から大学史に関する展示会開催の要請がありました。そこで、本部研究推進部学術情報課（日本大学図書館）とも連携して、日本大学会館での展示内容に一部手を加えた展示会を、開催する運びとなりました。



展示ポスター



展示会場



ギャラリートーク

内容は、「日中戦争」から「太平洋戦争」の時代を対象に、学徒への徴兵猶予年齢の繰り下げ、修業年限の短縮や戦時体制優先の教育組織への改編などを軸とした構成とし、「商経学徒隊結成式」の写真「専門部法科生の防空演習」の写真「出征学徒の遺言状」「昭和18年の仮卒業証書」「戦時託児所の設置通達書」など、学徒の生活や大学組織が変容していく様子を見て取れる、写真や資料を展示しました。

併せて、大学図書館での開催であることから、戦後に刊行された『きけわだつみのこえ 日本戦没学生の手記』『消えた春　特攻に散った投手石丸進一』といった戦没学徒たちに関する書籍類も展示しました。

展示期間中、法学部以外からも98名の来館者があり（学部内は未集計）、12月８日にはギャラリートークも実施しました。（髙橋）

◆大学昇格を支援した校友　楢崎平太郎

日本法律学校第二回卒業生に楢崎平太郎という人物がいます。楢崎は、室蘭で海運業を営んでいた実業家ですが、日本大学が大学昇格した際に多額の寄付をしたことはあまり知られていません。今回は大学昇格を支援した校友の楢崎平太郎を紹介いたします。

楢崎平太郎は、明治４（1871）年５月、備後国芦品郡駅家村（現・広島県福山市駅家町）に楢崎家の長男として誕生しました。明治23年、同郷出身の実業家である井上角五郎を頼り上京、井上は法学を志す楢崎のために菊池武夫を紹介しました。井上角五郎は、北海道炭礦鉄道社長、日本製鋼所会長などを務めるとともに、衆議院議員として、第１回から47回までの帝国議会に参加した人物です。菊池武夫は中央大学創立者のひとりで、司法大臣秘書官、司法省民事局長を経て退官し、明治24年に代言人として事務所を構えました。この菊池の事務所で楢崎は働きながら日本法律学校に通いました。

明治27（1894）年７月、日本法律学校を卒業（第二回生）、その後は郷里の広島で教鞭をとりました。明治31年、楢崎は、井上角五郎の紹介で北海道炭礦鉄道株式会社室蘭売炭所に入社して本船係（石炭の販売、本船への積み込み）となります。明治35年に独立して楢崎回漕店を創立、釜石製鉄所に運搬する石炭の積み込み作業を請け負います。明治43年には、菊池武夫の事務所で共に働いていた三宅碩夫弁護士の融資を受けて、海幸丸（1,568トン）を購入、海上運送に乗り出しました。大正元年には楢崎商店と改名、大正５（1916）年には北海道会議員選挙にも当選し、北海道一の高額納税者となりました。

室蘭は楢崎が来た当初、人口5,000人ほどの小さな町でした。しかし、軍備拡張に伴い重化学工業が重要視された時代の中で、室蘭にも製鋼所、製鉄所が設置され、大正６年には人口が45,000人を超える港湾都市として発展しました。この進展著しい室蘭において、楢崎は海運業で業績を大きく伸ばすとともに、室蘭町会議員、室蘭商業会議所（後の商工会議所）会頭として室蘭の発展に深く寄与しました。

大正８年頃、楢崎と三宅の間で大学昇格の話題となりました。中央大学でさえ昇格のための供託金の基金が準備できていないので、日本大学は到底無理だと中央大学の校友である三宅に言われた楢崎は、日本大学でも必ず作ると言って大学に寄付を申し込みました。大正７年に公布された大学令では、従来は官立の帝国大学に限られていたものが、公立・私立であっても条件を満たせば大学として認可されることとなりました。この認可を受けるためには、大学予科の開設、教育環境の整備、専任教員の配置などとともに、一定額の基本財産を供託することが必要でした。日本大学の場合、法文学部と商学部の２学部設置を申請していたため、60万円の供託金が必要でしたが、財



楢崎平太郎（『楢崎産業六十年史』より）



旧北炭室蘭海員倶楽部（室蘭市）

大正15年建設の北海道炭礦汽船㈱の海員倶楽部。井上角五郎の別荘があった場所に建設された。日本遺産。

政基盤が貧弱な私立にとって、この供託金の調達は大学昇格への高い壁となりました。

大正９年１月の『日本法政新誌』には、基金募集の経過報告として、楢崎平太郎から10万円の寄付があったことが記されています。最終的な寄付額は不明ですが、当時の東京市長の年俸が6,000円ですので、いかに高額な寄付であったかがわかります。全国の校友の熱心な募金活動もあり、日本大学はなんとか大学昇格に向けての準備が整いました。

大学昇格募金運動が盛んであった大正８年10月、評議員常会で寄付者への待遇が議題となり、5,000円以上の寄付者を日本大学維持員に推挙することなどが決議されました。維持員は日本法律学校が財団法人化した明治31（1898）年当初からある制度で、校長以外の理事を互選する役割を担いました。大正13年12月、塩野季彦理事選任の際に楢崎の署名があることから、大学昇格後、楢崎は日本大学維持員となったことが確認できます。

楢崎が維持員であった大正13年、日本大学は大阪に専門学校創立を申請します（後の日本大学大阪専門学校、近畿大学の前身）。この申請書類には、大阪分校基本財産として金14万円を寄付するという楢崎の寄付申込書の写しが含まれています（国立公文書館所蔵資料）。この当時、財政面で楢崎が本学に果たした功績はかなり大きかったといえるでしょう。

晩年、楢崎は各方面に事業を拡げましたが、昭和恐慌の影響もあり、決して業績は良好な状態ではありませんでした。しかし、本学の大学昇格を支援する一方で、室蘭港内の埋立事業や鉄道整備など、公共的な事業にも深く関与しました。昭和６（1931）年、楢崎は上京中に61歳で死去しました。楢崎が創業した会社は、現在も独立系専門商社のナラサキ産業株式会社として受け継がれています。（松原）



楢崎の偉業を讃える記念碑（室蘭市築地町）


旧室蘭駅舎（室蘭市海岸町）
明治45年建設。現在は観光案内所、展示スペースとして利用されている。


室蘭港（測量山より）

〔付記〕

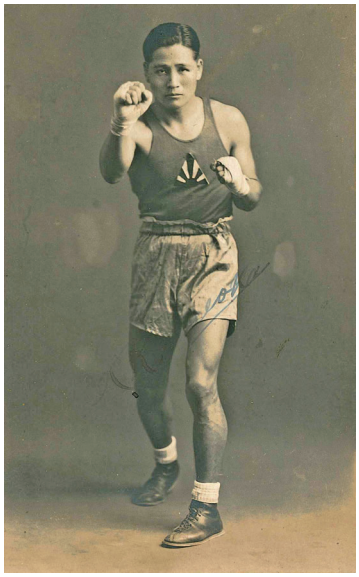
本稿執筆にあたり、ナラサキ産業株式会社総務人事部総務課の包國由美様に情報・写真のご提供をいただきました（同社の中村社長は生産工学部卒業とのこと）。記して御礼を申し上げます。

〔参考文献〕
『楢崎産業六十年史』（楢崎産業株式会社、昭和39年）
『室蘭港のパイオニア』室蘭港湾資料第６集（市立室蘭図書館、昭和45年）
『法学新報』第32巻10号、大正11年10月１日（『中央大学史資料集』第24集、中央大学入学センター事務部大学史編纂課、平成24年）
『日本大学百年史』第二巻（日本大学、平成12年）

◆拳闘選手・亀岡勝雄

昭和３（1928）年、本学11番目の競技部として拳闘部（ボクシング部）が誕生しました。創部からわずか４年後の昭和７年、ロサンゼルスで開かれたオリンピックに、同部所属の選手が出場を決めます。今回は、本学で初めてボクシング競技でオリンピックに出場した亀岡勝雄を紹介します。

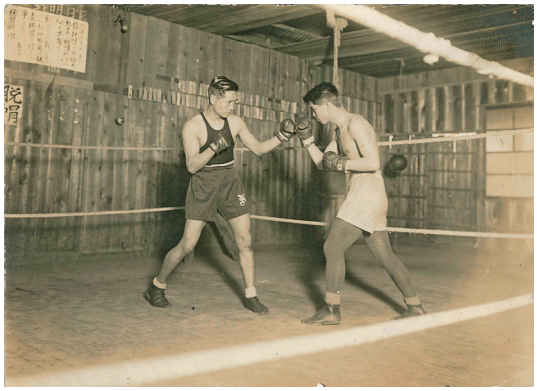
拳闘部が創立された昭和初期は、日本の大学におけるボクシング競技にとってまだ黎明期ともいえる時代でした。大学初の拳闘部を創設したのは明治大学で、大正13（1924）年のことです。翌14年に第１回全国学生拳闘選手権大会が開かれました。各大学において拳闘部の活動が活発になる中で本学に入学した選手のうちの一人が、亀岡勝雄でした。



亀岡勝雄

亀岡は、明治38（1905）年３月23日に福島県伊達郡桑折町に生まれました。伊達崎尋常高等小学校高等科第一学年終了後に上京し、犬養毅が校長をつとめた東亜商業学校に通いました。卒業後、関東大震災の影響で一時帰郷したものの、再び上京して帝国ホテルに勤めながら本学に入学しました。

亀岡がいつボクシングを始めたのかは不明ですが、昭和３年２月のアマチュア拳闘大会、５月のアムステルダムオリンピック（日本がボクシング競技において初めて出場した大会）の予選にライト級の選手として出場していることから、この頃にはすでに選手として活躍していたことが分かります。また、昭和５年１月の学生・一般対抗戦では、帝国ホテル所属のフェザー級の選手として出場して法政大学の学生と戦っており、同年５月の極東選手権大会には日本代表として出場、10月開催の第５回全日本アマチュア拳闘選手権大会（現在の全日本ボクシング選手権大会）でも、帝国ホテル所属としてフェザー級に出場し、優勝しています。亀岡が本学に入学した正確な年もまた不明ですが、昭和５年末には日本大学所属の選手として亀岡の名前が確認できますので、同年頃の入学ではないかと推定されます。日本大学では専門部法律科に在籍しました。



スパーリングをする亀岡（左）



ロサンゼルスオリンピック壮行会
左から亀岡（拳闘）、遊佐（水泳）、豊田（水泳）、杉本（水泳）。

社会人、学生、ボクサーの三足の草鞋を履いていた亀岡は、本学拳闘部では、ライト級またはフェザー級の選手として試合に出場していました。

昭和７年６月、オリンピック出場者を決める予選会において亀岡は見事勝利を収めてフェザー級代表選手の座を勝ち取り、４年前に準決勝で敗れた雪辱を果たしました。この時亀岡は、拳闘代表選手５名の中で最年長の27歳でした。

オリンピック出場が決まり、亀岡の経歴が改めて注目されるようになりました。昭和７年６月21日付の朝日新聞では「派遣選手変り種　ボーイさん　好漢、拳闘の亀岡君」のタイトルで、帝国ホテルのボーイとして働く傍らで大学に通い、さらにオリンピック代表選手の座を射止めた「特に異彩を放つ変り種」として紹介されています。なおこの記事が掲載された同日、日本大学では亀岡をはじめとするオリンピックに出場する本学学生４名の歓送会が開かれ、盛大に送り出しました。

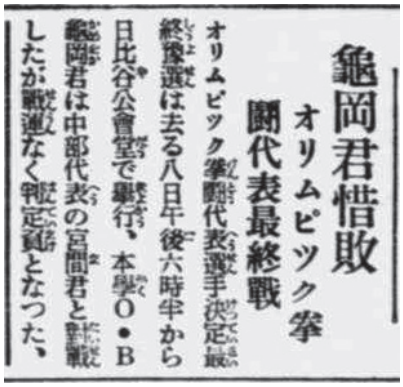
残念ながら、オリンピックでの亀岡の成績は振るわず、１回

戦でスウェーデンのカールソンに敗れました。翌年大日本体育協会が出した『オリムピツク大会報告』では、アマチュアボクシングにおける評価基準の解釈の相違、すなわち日本国内で評価される戦い方が必ずしも国際大会において評価されるポイントではなかったことが敗因であると結論付けています。

オリンピックから帰国後、亀岡は資格の問題から昭和７年の大学リーグ戦を欠場しましたが、翌年から試合に復帰します。８年から９年にかけては、本学拳闘部の主将を務めました。この時の監督は、後に本学の理事長を務めることになる柴田勝治（昭和８年高等師範部国語漢文科卒）でした。柴田は学生時代には拳闘部でライト級またはウェルター級の選手として試合に出ており、亀岡と共に汗を流した仲でもありました。



ロサンゼルスオリンピックに出発する大洋丸の出発
（拳闘選手等が乗った船）



亀岡君惜敗
オリムピック拳
闘代表最終戦
オリムピック拳闘代表選手決定最
終選は去る八日午後六時半から
日比谷公會堂で擧行、本學O・B
亀岡君は中部代表の宮間君と對戰
したが戰遂なく判定負となつた、

亀岡のベルリンオリンピック予選会の結果を伝える記事
『日本大学新聞』第255号（昭和11年4月20日）

亀岡は昭和９年３月に本学を卒業し、その後もボクシングを続けました。昭和11年のベルリンオリンピックの代表選手を決める予選会にもフェザー級の選手として出場しています。この時は決勝まで残りましたが、惜しくも判定負けとなり、代表には選ばれませんでした。

昭和15年から18年にかけては本学拳闘部の監督をつとめ後進の指導に当たりました。亀岡が監督に就任した時期は、戦時体制の中でボクシングが「敵性スポーツ」とされ、苦境に立たされた時期でもありました。昭和17年、全日本拳闘競技連盟は大日本体育会結成に伴い解消し、レスリング・重量挙と共に「重技部」として再編成されました。柴田勝治の回想によれば、この年10月４日に連盟最後の試合として「拳闘祭」が明治神宮外苑相撲場において開かれ、ここで亀岡は往年の名選手として拳をふるったとされています。戦渦の中で、アマチュアボクシングの大会は一時途絶えることとなりました。昭和20年11月、亀岡はアマチュアボクシングの再興を見ることなく、病により40歳の若さで急逝しました。

亀岡が没した翌年の６月、各大学の拳闘部が集い、「復活記念大会」が開かれ、大学ボクシングが再開します。日本大学ボクシング部は昭和22年の第１回から25年の第４回まで関東大学リーグ戦と全日本大学選手権大会を４連覇し、華麗な復活を遂げました。

（上野平）

〔参考文献〕
『第十回　オリムピツク大会報告』（財団法人大日本体育協会、昭和８年）
『日本体育協会五十年史』（財団法人日本体育協会、昭和38年）
桑折町教育委員会編『桑折町誌』（桑折町、昭和44年）
『日本大学ボクシング部五十年の歩み』（日本大学桜門ボクシング会、昭和56年）
柴田勝治『新世紀に向けて　五輪と日本大学に生きる』（東京新聞出版局、昭和63年）
『日本体育協会・日本オリンピック委員会100年史　PART２　加盟団体のあゆみ』（公益財団法人日本体育協会・公益財団法人日本オリンピック委員会、平成24年）
『日本大学ボクシング部創部90周年記念誌』（日本大学桜門ボクシング会、平成30年）

活　動　報　告

令和７年７月～令和７年12月

（大学史に関する活動）

〇調査・研究

７月１日	全史料協関東部会総会及び総会記念講演会（武蔵野スイングホール）
７月17日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（立教大学池袋キャンパス）
８月23日	全史料協総会（オンライン）
９月19日	創立者関係資料調査（外務省外交史料館）
９月25日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会（オンライン）
10月８日～10日	全国大学史資料協議会総会ならびに全国研究会（大阪大学）
10月14日	明治初期の神田地域関連資料調査（江戸東京博物館）
10月23日	学祖関係資料調査（日本大学図書館法学部分館）
10月28日	明治初期の神田地域関連資料調査（東京都公文書館）
10月30日～31日	楢崎平太郎関係資料調査（北海道室蘭市）
11月12日	学祖関係資料調査（熊本県熊本市）
11月13日～14日	全史料協全国大会及び研修会（熊本県天草市）
11月19日～21日	学祖関係資料調査（山口県長門市・山口市）
11月26日	出征関係資料調査（目黒区めぐろ歴史資料館）
12月１日	創立者関係資料調査（国立国会図書館）
12月３日	医学部本館保存モニュメント調査（医学部）
12月５日	創立者関係資料調査（国立国会図書館）
12月17日	全国大学史資料協議会東日本部会幹事会・研究会（お茶の水女子大学）
12月23日	全史料協関東部会定例研究会（神奈川県立公文書館）

〇展示：昭和100年・戦後80年企画

７月１日～９月30日	終戦から80年―戦時体制下の日本大学―（日本大学会館２階）
10月１日～12月26日	戦後高等教育制度の中の日本大学（日本大学会館２階）
11月12日～12月24日	終戦から80年―戦時体制下の日本大学―（日本大学図書館法学部分館）

〇研修・講演

12月８日	「終戦から80年―戦時体制下の日本大学―」展ギャラリートーク（日本大学図書館法学部分館）

当課発行の『大学史論輯　黌誌』については、日本大学リポジトリで閲覧が可能となっております。
（https://nihon-u.repo.nii.ac.jp/）
本誌の内容、日本大学の大学史および大学史資料に関するお問い合わせや情報提供は、下記までご連絡ください。

日本大学広報部広報課（大学史）
E-mail : nuhistory@nihon-u.ac.jp

日本大学大学史ニュース
第30号
令和８年３月10日
編集・発行　日本大学広報部広報課（大学史）
〒102-8275　東京都千代田区九段南４-８-24
TEL 03-5275-8444